



## Osaka Gakuin University Repository

Title	アレクサンドラ・フョードロヴナの日記 1917 - 1918 年 The Diary of Alexandra Fedrovna, 1917-1918
Author(s)	広野 好彦 (HIRONO YOSHIHIKO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 26 巻第 1・2 号 : 101-150
Issue Date	2015.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# アレクサンドラ・フョードロヴナの日記 1917-1918年

広 野 好 彦

## **The Diary of Alexandra Fedrovna, 1917-1918**

HIRONO YOSHIHIKO

### *ABSTRACT*

Alexandra Fedorvna was the last empress of the Romanov dynasty. She was notorious not only for the connection with Gregory Efimovich Rasputin, who tried to intervene the nomination of ministers in his own interests by influencing her Majesty. But also she was criticized for stubbornly persistent in helping her husband, Nicholas II to retain a divine right of ruling the Russian empire and refuse to respond to the social demand for constitutional rule, which finally demised the dynasty.

She kept a private diary in English. Because she was educated in England in her youth, though she was born as a princess in Hessen-Darmstadt, Germany. A portion of it remains, and was translated into Russian and published. The period of the published is from February 1917 to July 1918, when many important historical events such as Abdication of Nicholas II, February Revolution, October Revolution, and Peace with Germany occurred. And finally, all the Nicholas family was executed in July 1918.

The purpose of this article is to describe the last two years of the life of this royal family, depending upon not only the succinct

diary of Aleksandra but also other resources such as the diary of her husband and the memoirs of people surrounding her. During this period, her family had been under house arrest first at Tsarkoe-Selo, near the capital, then at Toborisk, and finally at Ekaterinburg in Siberia.

In this helpless situation, she was said to never complain and try to lead a normal life, caring for husband, children, and others. She was often blamed for narrow-mindedness because of her devoted belief in God. But in the hardest time, supported by the belief in the grace of God, she played the leading part in the family.

## はじめに

アレクサンドラ・フォードロヴナ（Александра Федровна）は、ロマノフ朝最後の皇帝ニコライ（Николай Александрович）2世皇后である。彼女に関しては、ラスプーチン（Распутин Григорий Ефимович）という怪しげな人物を宮廷に入れ、さらに政治介入を招き、ロマノフ王朝崩壊を招いたと評判が芳しくない。もちろんその背景には、皇太子アレクセイ（Алексей Николаевич）の血友病という事情があり、その重篤な発作を「救った」のがラスプーチンであったと信じられたことがある。

その彼女が認めた日記が革命の混乱にも関わらず、原本または複写の形で断片的に残されていて、彼女の人生の最後2年間（1917-1918年）に関しては公刊されている<sup>1)</sup>。筆者は皇帝ニコライ2世の日記に関心があるが<sup>2)</sup>、その理解を深めるために、アレクサンドラ日記を読み解こうということが拙稿の趣旨である。

最初に公刊日記全体に関して数点指摘する。

第1にその日記の性質であるが、公刊されている日記解題に明示されているように、それは彼女の「備忘のため」のものであるということだ。そこに記されているのは、子供の健康状態、宗教的祝日、面会と来客の記録、天候、書簡のやりとりの記録等の定型的なものがほとんどであり、感情に彩られた記述はまれである。

第2に、日記のこのような簡素さを補完するために、公刊された日記には注記が充実していて、そこには日記を別の角度から照射する同時代の史料が載せられている。拙稿もそれらを利用した。

第3に、アレクサンドラ皇后はヘッセン・ダルムシュタット出身ではあるが、早くに母親を亡くしたため、その教育は祖母の英国のヴィクトリア（Victoria）女王のもとでおこなわれた。もちろん彼女は結婚後ロシア語

1) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, февраль 1917 г. - 16 июля 1918 г., Новосибирск, 1999. なお引用文中の〔〕内部は筆者が補足したものである。

2) 拙稿「日露戦争と第一次ロシア革命-ニコライ2世の日記から」、大阪学院大学『国際学論集』16-1、2005年6月

を学び、マスターしたことも事実であるが、彼女は私的な記録に英語を用いていることが多い。彼女がニコライ2世に宛てた膨大な量の書簡は基本的に英語で書かれている。日記も基本的には英語で書かれているはずであるが、刊行されたテキストはロシア語に翻訳されている。皇后の英文の書簡に慣れたものには、ロシア語で書かれた日記を読むことは少し奇妙な感じがする。

最後に、アレクサンドラ日記では露暦（ユリウス暦）がもちいられている。西暦（グレゴリオ暦）からは、20世紀において13日遅れがある。ボリシエビキ政権は、露暦1918年2月1日をもって2月14日として、それ以降西暦を用いた。同日のニコライ2世日記には、この件について「誤解と混乱に果てがない」と批判的見解が付されている<sup>3)</sup>。そしてニコライは露暦を使い続けている。これに対してアレクサンドラ日記においては、1918年1月3日から、露暦と西暦を併記している。拙稿ではアレクサンドラ日記に従い、基本的に露暦、場合により露暦と西暦を併記する。

### ツァールスコエ・セロー

アレクサンドラ日記は1917年2月23日木曜日に始まる。その日に子供の病気の記述と体温計測の記録がある。

「…オリガとアレクセイは麻疹を病んでいる。…

6時、オリガ—37.7度、アレクセイ—38.3度…

9時、オリガ—37.7度、アレクセイ—38.1度」

このとき、ニコライ2世はロシア軍大本営のあるモギリョフの地に出発していた。ツァールスコエ・セロー（ペテログラードから南におよそ25キロメートル）のアレクサンドロフスキー宮殿に残された皇帝一家を麻疹が襲った。子供は5人いた。この時点の満年齢を付すと、長女オリガ（Олига

3) なお拙稿におけるニコライ2世日記のテキストは以下を利用した。Дневники императора Николая II, Москва, 1991.

ニコラевна）20歳、次女タチアナ（Татиана Николаевна）18歳、三女マリア（Мария Николаевна）16歳、四女アナスタシア（Анастасия Николаевна）14歳、長男アレクセイ12歳。

罹患したのは初めは長女オリガと長男アレクセイだけであるが、結果として子供が全員かかり、回復するのが4月下旬となる。その時までは体温の羅列が日記に頻繁に現れる。夫不在の中麻疹の子供の看病が彼女の大きな仕事の1つとなる。

さらに情勢も芳しくない。2月23日、ペテログラードの繊維工場における女性労働者が始めた「パンよこせ」デモが波紋を呼び、デモとストライキが広がり、「パンよこせ」の主張は専制廃止にまで急進化した。だが25日、アレクサンドラは、ニコライに向けて次のようにこの騒ぎを過小評価して報告した。「あれはよたものの運動です。若い男女が走り回り、パンがないと叫んで、結局のところ先導し、そして労働者が他人の労働を妨害しています。もし厳寒であれば彼らは家の中にとどまるでしょう。もしドゥーマが動きさえすれば、これはすぎ去り沈静化するでしょう<sup>4)</sup>」

しかしアレクサンドラの予測は外れた。

「2月27日月曜日 …サンクトーペテルブルク〔ママ〕では恐るべきことが起きている」

「2月28日火曜日 …部隊が庭園に配備された」

27日の「恐るべきこと」とは、秩序を守るはずの兵士たちが反乱を始め、労働者の動きに合流し始めたことを指すと思われる。そしてペテログラードの暴動がツァールスコエ・セローに影響を及ぼし始めた。皇帝に忠実を誓う近衛大隊の部隊がアレクサンドロフスキー宮殿の庭園に配置されたことが28日の項目に簡潔に記されている。

「3月2日水曜日 …地下室を通過して兵士のところに行った」

4) Fuhrmann Joseph T. (eds.), The complete wartime correspondence of Tsar Nicholas II and the Empress Alexandra, April 1914 – March 1917, West Point, 1999, p.692.

という記述も見える。アレクサンドラ皇后がアレクサンドロフスキー宮殿を警備している兵士のところに向かい、反乱側との衝突を避けるように請願した。皇太子家庭教師ジリヤール（Gillard Pierre）がこの件について詳述している。

「このとき、私たちは電話により、反乱者が私たちの方向に進んでいること、そして彼らは宮殿から500歩のところで歩哨を殺害したばかりであることを知った。銃の発砲が益々接近し、衝突は不可避と思えた。皇后は、目の前で流血がおこなわれると考えて、恐怖のために我を忘れて、マリア・ニコラエヴナとともに出て行き、兵士に対して平穏を維持するよう促した。彼女は、反乱者と交渉に入るよう懇願した。決定的瞬間が到来した。警鐘が皆の心を締めつけた。不注意が白兵戦や虐殺を引き起こすかもしれないなかった。双方から将校が出されて、交渉が始まった。かつての上官の言葉と宣誓に忠実であったものの決意は、反乱者に効いた。興奮が少し収まり、ついに、両側の間に中立地帯を作ることが決定された。かくして夜は過ぎた<sup>5)</sup>」

アレクサンドラ皇后が気丈にもマリアを連れて、兵士たちに流血を防ぐことを懇願したのだ。流血騒動に子供たちが巻き込まれないためである。事態は急展開した。

「3月3日金曜日 …聞くところによれば、ニコライが退位した。ベイビー〔アレクセイ〕のためにである。電話で大本営のニコライと話をした。彼はそこに着いたばかりであった」

革命の奔流を食い止めるためにニコライは2日から3日の夜に、皇太子アレクセイではなく、弟のミハイル・アレクサンドロヴィチ（Михайл Александрович）大公に皇帝の位を譲った。ニコライが、騒乱を収めるために首都に向かう途上のプスコフにおいて立ち往生したときであった。もっともミハイル大公は、その翌日帝位を放棄せざるを得ない状態に追い

5) Gillard Pierre, *Le tragique destin de Nicolas II et sa famille*, Paris, 1921, p.177.

込まれた。

他方その後ニコライはモギリョフに向かい、アレクサンドラと連絡を取り合ったのだ。アレクサンドラの記事には次のような記述も見える。

「3月5日日曜日 …11時半、パーヴェル、グチコフ、コルニーロフ将軍」

臨時政府陸相グチコフ（Гучков Александр Иванович）とペテログラード軍管区司令官コルニーロフ（Корнилов Лавр Георгиевич）将軍の訪問に際して、ロマノフ家の名代としてアレクサンドラから求められてパーヴェル（Павел Александрович）大公が立ち会った。コルニーロフ将軍は、ツァールスコエ・セロー駐在部隊に関して、アレクサンドロフスキー宮殿の安全を保証すると述べた。

「3月8日水曜日 …コバイリンスキー、コルニーロフは、私たちが監禁された状態にあると宣言した

2時、…この瞬間から宮殿に居合わせているものは孤立していると考えられ、いかなる局外者とも会えなくなった」

コバイリンスキー（Кобылинский Евгений Степанович）は、コルニーロフのもとにあるツァールスコエ・セロー警備司令官である。前日の臨時政府における「退位した皇帝ニコライ2世とその配偶者の自由が奪われたと認め、退位した皇帝をツァールスコエ・セロー宮殿に運ぶ」という決議に基づく行為である。ここに皇族の拘禁状態が発生したのである。

「3月9日水曜日 …11〔時〕45分、ニコライ到着」

ニコライ2世がツァールスコエ・セローに戻った。同日の彼の日記。「早くそして首尾よくツァールスコエ・セローに到着した—11時半。しかし、神よ、何たる差異か。通りや宮殿の周囲の公園内部に歩哨がいて、他方玄関の内部には少尉補のようなものがいた！上に行き、そこでいという



アリックス〔アレクサンドラ皇后〕と大切な子供たちにあった。彼女は元気で健康そうであり、彼らは皆暗い部屋で横になっていた。しかし皆の気分は、マリアを除いて良かった。マリアは最近麻疹が始まった。アレクセイの遊戯室で昼食と正餐をとった。忠実なる〔宮廷式部官〕ベンケンドルフに会った。〔皇帝の副官〕ヴァーリャ・ドルゴルコフとともに散歩をし、彼と庭を散歩した。なぜならばそれ以上出ることができないからである！お茶の後で、ものを陳列した。夜にこちら側の住民をすべて回り、皆一緒に過ごした」

翌日10日、ニコライは次のように書く。「よく眠れた。私たちが現在そのもとにいる条件にも関わらず、私たちが皆一緒にいるという考えは、喜ばしく慰めである」家族思いのニコライの気持ちが表れている。そしてその「条件」であるが、アレクサンドラ日記には次の一文が挿入されている

「3月11日土曜日 …警備司令官が私たちのすべての書簡、すべての公用封書を読んだ、全く入念に」

アレクサンドロフスキー宮殿警備司令官コツェブ（Коцебу Павел Павлович）が、コルニーロフから受けた訓令の中に、次のような項目があった。「宮殿外のすべての人物との書簡のやりとりは、二等大尉コツェブを通じてのみ許可される。コツェブは、すべての書簡、覚書、電報の厳格な検討をしなければならず、それらのうち、家政的性質ならびに健康、医療的援助等に関する情報で、必要とされるもののみ個別的に許可するのである。すべてその他は軍管区参謀部に提示しなければならない<sup>6)</sup>」しかしコツェブは、上記記事にも関わらず、この件に関するチェックが甘くすぐに更迭されることになる。

「3月21日火曜日 …3時、マリア—37.8度、ケレンスキー。  
…アンナとリリは、ドゥーマに連れて行かれた。…」

6) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.40.

…司法大臣ケレンスキーは、リリとアーニャを連れて行った。彼はコロヴィチェンコを私たちの警備司令官として連れて来た」

臨時政府司法大臣ケレンスキー（Керенский Александр Федрович）が宮殿に現れ、新しい宮廷警備司令官を紹介した。ケレンスキーは後にこの場面におけるニコライとアレクサンドラに対する印象を書きとめている。「すべての家族が、隣接する部屋の窓辺の小さな机の周りに完全に茫然自失して立っていたのであった。この集団の中では、軍服の背の高くない人物が際立っていた。そして顔に弱々しい微笑を浮かべて、ためらいがちに私の方に来た。これがニコライ2世であった。私が待っている部屋の敷居のところで、彼は立ち止り、これ以上何をすべきか知らないかのようにであった。…アレクサンドラ・フォードロヴナは、傲慢に、形式張り、荘重に、もっとも強制されたかのようにであるが、自己の手を伸ばした。この中に夫と妻の間の性格と体温の差が現れた。私は一目見て次のことを理解した。アレクサンドラ・フォードロヴナは、知的で魅惑的な女性であり、今は打ちひしがれていて興奮しているが、鉄の意思を持っているということである。数秒の間に、長年にわたり宮廷の壁の中で高まりつつあった悲劇が私に明らかとなった。この後に続く数回のツァーリとの面会は、私の印象を裏書きするばかりであった<sup>7)</sup>」

アレクサンドラが鉄の意思で宮廷を支配しているというのが一般的に持たれていた印象であった。そしてそれが悲劇につながっているというのがケレンスキーの見立てである。悲劇とは何であろうか。それに関係すると思われるのは、彼の来訪に際して、アレクサンドラの2人の親友アーニャ（Вырбова Анна Алексадровна）とりリ（Ден Юлия Алексадровна）が宮廷から連れ出されていることである（前者は麻疹の病床にあったにも関わらず）。アレクサンドラにとっては大きな衝撃であった。同種の記述が2回も同じ日に記されている。補足的な記述もある。

7) Керенский А. Ф., Россия на историческом павороте: Мемуары, Москва, 1993, ст. р.230.

「3月22日水曜日 …書類を燃やした。アーニャは要塞に収容されている」  
「3月23日木曜日 …アーニャは要塞の中。リリは別の建物の中」

アーニャ（アンナ・ヴィルボヴァ）は臨時調査委員会により「闇の勢力」に協力し戦時中ドイツを幫助した疑いがかけられたのである（もちろん後には嫌疑は不十分ということで、7月には釈放はされる。リリは連行即日釈放）。彼女は、この前年末に暗殺された怪僧ラスプーチンの信奉者であり、彼とアレクサンドラ皇后の仲介役として機能した。上記「闇の勢力」とはそのことに関連していると思われる。そしてラスプーチンが皇室を牛耳るアレクサンドラを通じて、ロシアの政治に介入し、ロシアを裏切りドイツに有利な行動をおこなったという嫌疑があったのだ。

「3月27日月曜日 …ニコライはケレンスキーと会った  
…ニコライと私は食事のときのみ会うことが許された。しかし一緒に眠ることは許されない」

同日のニコライ日記によれば、アレクサンドラを孤立させることに関するケレンスキーの言い分は次の通りである。「〔ケレンスキーは〕私たちがであろうのは食事の時間だけにし、子供たちとは別に過ごすように求めた。高名な労働者と兵士代表ソヴィエトをなだめておくためには、彼にはこれが必要である。圧力を避けるために、従わざるを得ない」

おそらくアーニャの捜査、ひいてはアレクサンドラのために口裏をあわされるのが恐れられたと思われる。ケレンスキーは次のように語る。「彼〔ニコライ2世〕の妻は、権力の喪失にひどく苦しんでいて、どうしても新しい状況に慣れることができなかった。〔…〕周りのすべてを、彼女は自分の不幸、疲労、受け入れられない敵意についての果てしない話で悩ませた。アレクサンドラ・フォードロヴナのようなものは、決して何も忘れることはなく、何をも許すことはない。彼女の側近を審理する時期において、私は、兩人を証人として呼び出す際に、彼女のニコライ2世との共謀を防ぐためにある種の方策をとらざるを得なかった。彼女が夫に対し

て圧力をかけるのをやめさせざるを得なかったと言う方が正確であろう。ここから出発して、私は、夫妻を別れさせる一時的な方策を指示した。彼らに対して、過去の問題には触れないという条件で、朝食、正餐、夕食のときのみ会うことを許したのであった<sup>8)</sup>」

このような別居は二十日ほど継続した。この件に関して次のような記述がある。

「4月12日 …ケレンスキー」

この日、ケレンスキーはアレクサンドラ皇后と1時間にわたり直に談話した。宮廷式部官ベンケンドルフ（Бенкендорф Павел Константинович）伯爵によれば、皇后の政治介入について聴聞がおこなわれたという。「大臣は丁重であり抑制されていた。彼は皇后陛下に対して、政治の中で演じた役割、大臣選任や国事への彼女の介入について尋ねた。皇后陛下は彼に対して次のように返答された。皇帝と彼女は最も仲睦まじい家庭を作っていて、その唯一の喜びは、家庭生活であり、彼らはお互いにかなる秘密もなく一彼らは皆を共有しているということである。それゆえに、最近の重苦しい時期において、政治が彼らの間で大きな位置を占めたのも驚くべきことではない。最後には、皇帝が常に軍にいて、長期にわたり自己の大臣に会わないので、当然のことながら、彼女に対してある種の意義の小さい指示を伝えることを依頼したのであった。何よりも頻繁に、彼女が皇帝と議論したのは、彼女だけでなく皇帝にも関わる、赤十字の問題、ロシア人捕虜について、彼女が関係している多数の慈善機関に関する諸問題である。彼女は、自己の義務を果たしているにすぎないと確信している。疑いのないことであるが、一緒に大臣の任命も議論がなされた。しかし、このような緊密な夫婦関係において、別のあり方がありうるのだろうか？私は後になって初めて知ったことであったが、皇后の話の明瞭さ、率直さ、断

8) Там же, стр.232.

固たることが大臣を非常に驚かせたということであった<sup>9)</sup>」

仲睦まじい夫婦であるから、秘密が共有された。皇后としては皇帝の指示のもと意義のあまりないことが許されたにすぎないということが彼女の弁護の方針であった<sup>10)</sup>。

当のケレンスキーによれば、次のように興奮しながら、ロシアを愛していると主張する皇后の姿が描かれる。「私たちはロシア語で談話をした。それをアレクサンドラ・フョードロヴナは、口ごもりながら強いアクセントをもって話した。突如彼女の顔が膨らみ、そして彼女は興奮して話した。『人々が私をなぜ悪しざまに言うのか理解できません。私が初めて当地に到着してから、私は常にロシアを愛しています。私は常にロシアに共感しています。なぜ人々は、私がドイツと私たちの敵の側にいると考えるのでしょうか？私の中にはドイツ的なものはありません。私は、教育に関して英語人であり、私の言葉は英語です。彼女はものすごく興奮したので、談話はそれ以上は不可能であった<sup>11)</sup>』」

ところで、ジリヤールによれば、すでにこのときにケレンスキーの元皇族に対する態度が軟化していたという。「皇帝陛下に対するケレンスキーの態度は、初期におけるものと同じではなかった。彼は、裁判官のポーズをとっていない。私は確信するのであるが、彼は皇帝陛下を理解し始め、彼の道義的影響力のもとに下りつつあるのだ。これは、陛下に接近するすべての人物に起きるのである。ケレンスキーは新聞に対して、皇帝陛下ととりわけ皇后陛下に対して行っている攻撃をやめるように求めた。この中傷は、火に油を注ぐだけであった。彼には囚われたものに対する責任感が

9) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.50-51.

10) もっともベンケンドルフ伯爵の弁は飽く迄も弁護である。アレクサンドラ皇后が、政治に介入したのは疑いが無い。もっとも有名な事例は、1916年9月、ラスプーチンの助言に従い、ためらいがちなニコライ2世に対してドゥーマ副議長プロトポフ(Александр Дмитриевич Протопопов)を内相に強く推薦したことである。同年11月、首相に予定されていたトレポフ(Александр Фёдорович Трепов)運輸相の反対にも関わらず、プロトポフは皇后の支持を得て内相に留任した。参照: Lieven Dominic, *Nicholas II: Emperor of all the Russias*, London, 1993, pp.224-226. ただし、これがドイツに便宜を図るものであったかどうかは判然とし無い。

11) Керенский А.Ф., стр.232.

あった。しかし私たちの外国出発に関しては一言もなかった。これは彼の無力を証言している<sup>12)</sup>」

最後に述べられているツァーリ一家の外国への出発であるが、ケレンスキーの回想によれば、3月上旬、元皇帝一家をムルマンスクに移動させる準備をさせることが臨時政府により課されたという。イギリスへの出国を予定したものであるが、その月の終わりごろには、英国政府は受け入れに消極的な姿勢を示し始め、この問題はうやむやになった。他方、この同じケレンスキー来訪時に、ツァーリ一家の侍医であるボトキン（Боткин Евгений Сергеевич）が、皇后と子供たちの健康を考えて、気候に恵まれているクリミアへの移動を訴えたとベンケンドルフ伯爵は伝えている。「皇后陛下のお出ましになるまで、ボトキン医師はケレンスキーと相当長い話をした。皇族の家庭医として、彼は大臣に対して、両陛下と子どもたちの健康は、良い天候と、平穏な場所における長期の滞在を必要としていると述べるのが自己の義務と考えた。[…] 大臣はこの考えに完全に同意し、クリミアにおける滞在がすぐに手配されるであろうと理解させた<sup>13)</sup>」しかしこれも実現されなかった。

「4月15日土曜日 …タチアナードイツ語の講読、10時半-11時半まで書き取り」

「4月18日火曜日 …

10-11時、アレクセイと英語の講読。

11-12時、タチアナとドイツ語の講読と書き取り」

アレクサンドラ皇后は、幽閉された状況にある子供の教育にも配慮している。この時期においては、まだオリガ、マリアは麻疹で寝ている状態であるが、次女タチアナに対してドイツ語を授けている。18日にはアレクセイとの勉学の様子が記載されている。日記には記述が欠けているが、アレクセイとの勉学はその前日から開始されたという。これに関して4月16日

12) Gillard Pierre, p.190.

13) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, стр.50.

付の家庭教師ジリヤールの記述がある。「夜に、アレクセイ・ニコラエヴィチの学課に関して、両陛下と長い談話。私たちのもとには教師がないので、何らかの解決策を見出さざるを得なかった。皇帝陛下は歴史と地理、皇后陛下は宗教を担当され、その他は、ブクスゲヴデン男爵夫人（英語）、シュネイデル女史（算数）、医師ボトキン（ロシア語）と私で負った<sup>14)</sup>」

ジリヤールが記しているようにアレクサンドラ皇后は宗教を担当した。アレクサンドラ皇后はそれが子供たちにとって持つ効果だけでなく、自分にとっても大きな慰めであることについて、かつて自己が管理をしていた病院に入院していた二等大尉スイロボヤルスキー（Сыробоярский Александр Владимирович）に対して認めている。「とてもたくさん福音書と聖書を読んでいます。なぜならば子供たちの課業に対する準備をする必要があるからです。これは大きな慰めです。後で彼らと、私たちの精神的糧となっているものすべてを読むことです。そして毎回新しいものを発見し、よりよく理解します。私のところにはこのような良い本がたくさんあり、常にそれから抜き出しています。そこにはいかなる欺瞞もありません。〔…〕その中に多くのことに対する答えを見出します。それらは力を与え、子供との学業のための慰めを与えています。彼らは多くのことを深く理解しています。魂は苦難の中で育っています〔…〕<sup>15)</sup>」

ツァールスコエ・セローにおいては、幽閉状態にあるとはいえ、後の時期と比べて比較的自由があった。庭園の散歩や薪を割るなど野良作業が比較的自由であった。もっとも元皇帝見物の野次馬には悩まされた。ニコライ日記4月2日によれば「日中は、橋のところで作業が開始された。しかしすぐに柵の向こうに野次馬の集団が集まった一去って、残りの時間を庭で退屈に過ごさざるを得なかった」とある。さらに庭園の片隅に菜園がつくられ、体調が良い場合はアレクサンドラを含む元ツァーリ一家や従僕が庭園の作業をした。

14) Gillard Pierre, pp.190-191.

15) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, стр.55.

「4月29日土曜日 …皆は庭に出た。その後野菜を植えるために、草を掘り返すものもいた」

「4月30日日曜日 …多くのは耕した、従僕、コック見習い等、私は一作業をした」

「5月6日土曜日 …婦人や皆が祝福した…」というそっけない記述がある。この日はニコライの49歳の誕生日であったのだ。ニコライ日記によれば「私は49歳となった。50歳にはそれほど遠くない！思いは、愛しいママにとりわけ向かう。手紙のやりとりさえできないのは厳しい。新聞紙上の愚かなまたは反感のある記事以外、ママについて何も知らない。一日は、日曜のように過ぎた。礼拝式、2階での昼食、パズル！菜園における共同作業、畝を作り始めた。お茶の後、徹夜禱、正餐、夜の朗読—いつもの年よりも愛しい家族とはるかに長くともに過ごした」家族思いのニコライにしては母親皇太後の消息がつかめないのが苦しいことがうかがえる。

また「5月25日木曜日 …11-12時、教会」という断片が見えるが、これはアレクサンドラ皇后の誕生日に際して、宮廷内部の教会に行ったことを意味する。ニコライによれば、「私の愛しいアリックスの誕生日。主よ、彼女に健康と精神的平穏を与えたまえ。礼拝式の前に、館のすべての住人が自己の祝福をもたらした。いつものように上で昼食をとった。日中アリックスは、私たちとともに庭に出た。庭で木を引いたり、切ったりした。7時半、娘たちと自転車に乗った。天気は素晴らしい。夜には『モンテクリスト伯』を朗読」

ケレンスキーの来訪は続く。

「6月3日土曜日 …ケレンスキーがニコライのところに来た」

来訪の目的は、ニコライの手元にあるロシアの内外政に関する文書を非常時調査委員会に提出させるためである。臨時政府代表リヴォフ（Львов Георгий Евгеньевич）公爵がその背景を語る。「世論を困惑させた主要な問題の1つは、次のような確信である。すなわち皇帝陛下は、ドイツ出身



の自己の配偶者の影響を受けて、単独講和を調印する用意があり、この方向性である種の試みさえおこなっていたということである。この問題は明らかとなった。ケレンスキーは臨時政府に対する報告において、皇帝陛下と皇后の無実とは完全にはっきりと確定したと断固として十分な確信をもって断言した<sup>16)</sup>」

「7月11日火曜日 …12時（ケレンスキーがニコライのところに来た）」

今回の来訪は皇帝夫妻に対する対独宥和疑惑ではない。元ツァーリ一家に対する攻撃を予測して移住を勧めに来たのである。ニコライ日記によれば、「午前中、アレクセイとともに散歩。じきに帰還してから、ケレンスキー到着について知った。会談の中で、彼は私たちの南方に対する出発の蓋然性について言及した。ツァールスコエ・セローが不穏な首都に近いためである。…」

ここで南方と記されているが、ベンケンドルフ伯爵はもっと具体的に示している。ニコライはリヴァディアを求めた。ケレンスキーもまたそれ以外に、オルロフスキー県のミハイル・アレクサンドロヴィチ大公の領地を示唆した<sup>17)</sup>。ともかく両者の間で南方への移動ということが了解されたようだ。首都から離れた土地、ツァーリ一家の健康のために過ごしやすい土地が求められた。

そっけない日記の記述の中に

「7月13日木曜日 …整理をした」

「7月29日土曜日 …荷造りする一ものを選びわけた」ということが見えているが引越しが念頭に置かれたものであることは言うまでもない。

ただしその方向は南方ではなく東方となった。7月28日付のニコライに日記に、次のような苦々しい気持ちを表す表現がある。「昼食後、ベンケ

16) Там же, стр.59.

17) Там же, стр.62.

ンドルフ伯爵から、私たちは、クリミアではなく、東方に3または4日の旅程のところにある遠い県の都市のいずれかに送られることを知らされた！しかしどこなのかは言われなかった。—警備司令官さえ知らない。他方私たち全員は、リヴァディアにおける長期滞在を大いに期待していたのだ!!」ケレンスキーはのちにこの状況について次のように説明している。「…彼らを南部に運ぶことは考えられなかった。そこにはすでに大公の何人かと〔皇太后〕マリア・フョードロヴナ (Мария Федоровна) がすでに住んでいた。このためにそこにおいては、すでに誤解が起きていた。結局のところ私はトボリスクに決めた。[…]<sup>18)</sup>」かくして皇帝一家はシベリアのトボリスクに送られることとなった。

「7月30日 日曜日 …ペイビーの13回目の誕生日。

教会 11-12時

1時半、運ばれたズナメニア聖像の前で祈祷」

出発準備にあわただしい中でアレクセイ皇太子の誕生日が迎えられた。ニコライは日記においてアレクセイについて祈ったことを記している。「本日、愛しいアレクセイが13歳となった。主よ、彼に対して、現在の苦しい時期における健康、精神と肉体の強靭さを与えたまえ」なお、アレクサンドラ日記に記されているズナメニア聖像は奇蹟を起こす聖像として知られている。アレクサンドロフスキー宮殿を出発にあたっての饞でもあろう。

「7月31日 月曜日 …6時、私たちの使用人と別れの挨拶をした。…

11時、ケレンスキーがミーシャを10分間、ニコライのところに連れて来た」

ケレンスキーが、ツァーリ一家の出発にあたり、ニコライの弟のミハイ

---

18) Керенский А.Ф., стр.235.

ル・アレクサンドロヴィチ大公を連れて来たのである。ベンケンドルフ伯爵は、この際ケレンスキーに対してツァーリ一家の将来について尋ねている。「彼〔ケレンスキー〕は何度か私に対して、両陛下の不在は、数カ月程度であると保証したので、私は、皇族の帰還をいつごろと期待できると尋ねた。彼はまたぞろ私を次のように説き伏せた。11月における制憲会議ののちには、なにもものもツァーリのツァールスコエ・セロー帰還、または望まれるところへの出発を妨害しないであろうと<sup>19)</sup>」ケレンスキーは数カ月でツァーリ一家の帰還が実現できると考えていたのである。しかしその見通しは甘かった。この兄弟の別れは最後の別れとならざるを得なかった。

### トボリスク (1917年)

「8月1日火曜日 …横になり眠れず、夜中列車に乗車するための準備をしていて、ようやく5時20分自動車で家を発った」

アレクサンドロフスカヤ駅から一行は列車<sup>20)</sup>に乗り換え、8月4日午後11時、チュメニに到着。そこで汽船「ルーシ」等で川を北に向かい、8月6日午後6時にトボリスクに着いた。しかしそこにおいて住居として提供されるはずのいわゆる知事邸の準備がおこなわれていないことが判明。そして8月13日まで船上に止めおかれる。移動の負担がツァーリ一家に影響を与えていることがアレクサンドラ日記から見える。

「8月9日水曜日 …マリア37.7度、ベイビーは手が腫れている。  
…素晴らしく暖かい夜、甲板に座っていた。私の首と歯がひどく痛んだ」

19) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.66.

20) この列車には日本の国旗と赤十字使節団のマークがついていたという。マーク・スタインバーグ／ウラジーミル・フルスタリョフ編、川上洗訳『ロマノフ王朝滅亡』、大月書店、1997年、191頁。

マリアの熱はひいたが、アレクセイの調子は一進一退。アレクサンドラの体調も思わしくない。8月10日に汽船「ルーシ」から知事邸に移動する際、彼女は歩けなかった。

「8月10日 …タチアナと私は自動車で行き、残りは徒歩で行った。私たち7人とジリクは同じ館に住み、残りは通りの反対側にある別の館に住む」

元ツァーリ一家（元皇帝夫妻と5人の子供）とジリヤールは知事邸、その他はその向かいにあるコルニーロフ邸に収容された。

トボリスクでは当初閉ざされた空間における単調で平穏な日々が流れた。

「8月25日金曜日 …奇蹟的な天気。もっとも少し風が吹いた。日陰で17度。いつものように一日を過ごした」

単調で退屈な日々であることは同日のニコライの日記からも見ることができる。「暖かい天気、強い東風を伴う。小庭における散歩も、ありえないほど退屈となった。ここにおいては蟄居しているという感覚が、ツァールスコエ・セローにおけるよりもはるかに強い。…」

「9月1日金曜日 …新しいコミサール、パンクラトフが来た。正餐の前に彼に会った」

臨時政府から派遣された、元皇帝一家の警備に関するエスエル出身のコミサールがトボリスクにやって来たのだ。ニコライ日記によれば、「臨時政府からの新しいコミサール、パンクラトフが来て、自分の補佐、服装の乱れた少尉補とともに侍従団の館に落ち着いた。外見は、労働者または貧しい教師。彼は私たちの往復書簡を検閲するだろう。[…]'」パンクラトフ（Панкратов Василий Семенович）自身による、ニコライとの面会描写が残されている。暮らし向きはどうかというパンクラトフの質問に対して、

ニコライは悪くないと答え、不都合な点として次をあげた。「なぜ私たちは、教会に行くこと、市街の散歩が許されていないのですか？私が逃亡することが恐れられているのですか？私は決して家族を捨てません」パンクラトフはこれに対して、「そのような試みは、あなたとあなたの立場を悪化させるだけだろうと思います。教会にあなた方を連れて行くことはできません。これに対しては私の許可があります。市街の散歩に関しては、当面はおそらくできないでしょう<sup>21)</sup>」閉ざされた環境から少しでも出たいというのがニコライらの願いであった。教会に行くという形でそれが部分的に実現される。

「9月8日金曜日 …12[時]に徒歩でブラゴヴェシチェンスキー大聖堂にお勤めに行った。私は自分の車いすで。都会風の公園を經由して。兵士がすべての経路に配置されていた。道路を横切るところに群衆がいた。非常に不快であった。しかし、6カ月ぶりに本当の教会に行けたことは感謝している」

このように不定期に、種々の理由のために拒否されることがあるが、知事邸の近隣の教会に行くことが許された。移動の際の群衆と警備に辟易するが、それでも外に出て教会に行き精神的満足を感じられる様子を知ることができる。ただここで車いすということが指摘されているように、アレクサンドラの体調がすぐれなかった。船でトボリスクに移動中から、顔と歯が痛み続いていた。

「9月16日土曜日 …37度1分、またほとんど眠れず、顔と歯の強烈な痛み。…」

「9月17日日曜日 … [午後]10時、私はベッドに横になった。顔と歯のあらゆる痛みのために、またほとんど眠れない夜が続いたために、とても衰弱を感じたから」

---

21) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, стр.84.

9月23日、アレクサンドラは、クリミアにいるクセニア（Ксения Александровна）大公夫人（ニコライの妹）に対して書簡を書いているが、その際に次のように訴えている。「皆は元気です—私自身はすでに6週間、顔の神経痛と歯痛にひどく苦しんでいます。非常に苦しい。ほとんど毎夜寝ていません。ずっと歯科を待っています。—彼を呼ぶ許可はまだありません。静かに暮らしています、素晴らしく十分に設えられていて—もっともすべてから離れているのですが—孤立しています。しかし神は寛容であられる […]」<sup>22)</sup>

このころ警備兵の元ツァーリ一家の生活に対する干渉が目立ち始める。

「9月23日土曜日 …私たちのために運ばれた箱に入ったワインは、守備隊兵士の希望により、川に流された。スキャンダルを取めるために、ボデは数日間沈黙せざるを得なかった。この話が表面化し、これゆえに私たちはまたぞろ明日教会に行くことができない」

ボデ（Боден Н. Г.）は、元皇帝一家の私物をトボリスクに運ぶために宮内省から派遣されたものである。その物資の中にワインを見つけられ、将校のためと誤解し気分を害した警備隊兵士をなだめるために廃棄されたということである。このために、近隣の教会での礼拝が禁じられた。ニコライによれば9月25日に、兵士たちによりワインの調査がおこなわれた。「9月25日。月曜日。素晴らしい穏やかな天気、日陰で14度。散歩時に、警備司令官、コミサールのいやらしい補佐、二等大尉ニコリスキー、3人の委員会狙撃兵が、ワインを見つけるために、私たちの館の部屋を視察した。何も見つけられず、彼らは半時間後に出て行き、去った。お茶の後で、ツァールスコエ・セローから着いた物資が私たちのところに移され始めた」

22) Керенский, стр.90-91. アレクサンドラ日記には次のようにある。「10月17日火曜日 歯科医コストリツキーが（クリミア）から来た」。彼は10日ほど滞在して皇族の歯の治療にあたった。

私生活に対する「侮辱的圧力」は続いた。

「9月30日土曜日 …（パンクラトフにより）私たちの部屋と侍従の写真を撮ることを命じられた」

家庭教師ジリヤールはこれに対して必要性なしと抗議をしたが、これに対してはパンクラトフから「以前において我々は写真を撮られることを強制された。今度は彼らの番である<sup>23)</sup>」との返事がおこなわれた。写真は皇帝一家に屈辱を感じさせるためのものであることが明らかであり、この後身分証の携行も義務付けられた。

「10月28日土曜日 …第2の革命。臨時政府が更迭された。レーニンとトロツキーを頭に抱くボリシェビキ。…」

皇族一家の運命を大きく左右した事件が簡単に書きつけられている。家庭教師ジリヤールはトボリスクにおける情報の取りづらさと（10月革命の象徴であるボリシェビキの冬宮突入は25日夜から26日におこなわれた）、その中で流れてくるさまざまな事件について皇帝が心を痛めていることを指摘している。「私たちのトボリスク流刑時の最大の困難の1つは、ほとんど完全にニュースがなかったことである。書簡は私たちのところに非常に不正確にそして大いに遅延して届くので、新聞に関しては、私たちは、ざら紙に印刷された、現地の貧弱な小新聞で満足せざるを得なかった。その中においては、数日遅れて、何よりもしばしば歪曲されて省略された知らせが私たちに伝えられた。これに対して、皇帝陛下は、不安を持ちながら、ロシアで展開されている事件を追われていた。陛下は、国が破滅に進んでいることを理解されていた。[…]

その時私は、退位について遺憾の意を表すことを初めて皇帝陛下から耳にした。皇帝陛下がこのような決定をされたのは、彼の没落を願うもの

---

23) Gillard Pierre, p.201.

が、戦争を首尾よい終焉に至らせ、ロシアを救う能力があると期待されていたことであった。陛下は、敵の面前での抵抗が内乱の原因になることを恐れられたのであり、陛下のために1人のロシア人の血も流れることを望まなかったのであった。しかし彼の退位後、レーニンと彼の盟友たち、ドイツの金で雇われたものたちの出現は短期間で起きたのではなかったのか？その犯罪的宣伝は軍を退廃に導き、国を墮落させたのだ。陛下は、自発的退位が無益であり、陛下が、自国の幸せに従っただけであるのに、実際のところは退位により国に対して悪い影響を与えたことを見たとき、今や苦しんでいるのであった。この考えは益々強く彼を悩ませ始め、後には彼にとって大きな道義的苦悩の原因となった。[…]<sup>24)</sup>

トボリスクでは、ツァールスコエ・セローと同じように子供の教育にも配慮された。

「9月30日土曜日…

9〔時〕15分-10〔時〕。マリア、ドイツ語でヴェルネル（Вернер）の「Vineta」講読

10. 20-11〔時〕。アナスタシア、大ワシリイの伝記

12-1〔時〕、タチアナ、イザヤー詩篇1-9完了」

アレクサンドラの日記に見える上記の記述が、トボリスクにおける本格的な子供に対する教育の始まりである。しかしその注記によれば、すでに9月25日から定期的な学業が始められているとある（日記には9月25日の項目が欠けている）。そしてその分担が記されている。「ニコライ2世—ロシア史と軍事史、アレクサンドラ・フォードロヴナ—キリスト教要理と抜萃聖書、またドイツ語の課業、タチシチョフ公爵—ロシア語、II. ジリヤールとC. ギブス—フランス語と英語、ボトキン—生物学、ゲンドリコヴァ伯爵夫人—古代史。後になり、ピトネルが地理と文学の学課を教え

24) Ibid., pp.203-204.



始め、他方地元のギムナジウム教師バトルリン—数学の課業<sup>25)</sup>」

ただし、ギブス (Гиббс Сидней Иванович) は10月6日、ビトネル (Битнер Клавдия Михайловна) は10月8日に臨時政府の許可を得てトボリスクに着き、ニコライ一家に合流している。

夜間の楽しみとしてはニコライが種々の本を朗読することはすでに以前からおこなわれていたが、トボリスクでは、アレクセイが自分で撮った映画を上演している (10月5日、10月15日)。さらに新しい企画として、娯楽と勉学を兼ねた劇が家族により何回か上演されている。劇は主として英語やフランス語がつかわれた。初めの企画は12月6日である。演目と配役が記されている。

「12月6日 … 9〔時〕半、Maurice Hennequin «Le fuide de John» [モーリス・アンネカン「ジョンの超能力」、一幕物の喜劇。

デュプラーク—ミスター・ジリヤール

ジョン、彼の従僕—アレクセイ

リュシエン、デュプラークの甥—マリア

[上演は] 20分続いた—非常に良く演じられ、非常に面白い」

体を動かす楽しみもあった。

「12月28日木曜日 …ミスター・ジリヤールは足を怪我した」

このようなそっけない記述がある。庭に作った雪の山から滑り落ちたのが原因である。クリスマス前夜から降り積もった雪を利用して、知事邸の庭にジリヤールの指導のもとに雪山がつくられていたのである。このあたりニコライの次女タチアナは自己の家庭教師に対して次のように伝えている。我々が想像する様な深窓の令嬢とは似付かないお転婆であったようだ。「私たちの庭に、小山がつくられました。あちこち歩くことが退屈な

25) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, стр.92.

とき、それから滑ります。そこから落ちることには面白いことがあります。例えば一度ジリクは、私の頭のところに落ちました。私は起き上がるように求めました。彼はできませんでした。なぜならば自分で足を怪我したからです。足が痛んだのでした。なんとかして私は這い出しました。ものすごく愚かで面白いことでした。しかし彼は、数日間足のために横にならざるを得ませんでした。また別のときには、私は山から後ろ向きに滑りました、そして後頭部を氷にひどくうちつけました。山はあとかたもなく何も残っていないと思いました。でも山も、頭も壊れずに、痛みさえありませんでした。[…]<sup>26)</sup>」

クリスマスも幽閉されているなりにできる限りのツリーや飾りがおこなわれ、ツァールスコエ・セローから来た慣れ親しんだ警備隊にはアレクサンドラ皇后手作りの贈物が配られた。これが彼ら最後のクリスマスとなる。

「12月24日日曜日 クリスマスイブ 贈り物の準備をした。

12〔時〕。家において奉神礼。

…ツリーを飾り、プレゼントを開ける。

4〔時〕半。お茶。それから第14狙撃連隊警備隊のところに行った。

マルイシチョフ、20人。私は彼らに対して小さなクリスマスツリーと食べ物を持って行き、私が描いたしおりの着いた福音書を各人に。そこで過ごした。

7〔時〕半。下で皆と一緒に夕食、コーリヤも一緒。

…9〔時〕。随員のため—私たちの全従僕のためのクリスマスツリー」

「12月25日月曜日…

クリスマス…

7〔時〕15分。教会に行った。お勤めの後で一アブラツカヤの生神女マリアの奇蹟を起こすアイコンの前での礼拝」

---

26) Там же, стр.115.

元ツァーリ一家はクリスマスに教会での礼拝が許された。しかしこの数日後気になる記述がある。

「12月30日土曜日…

徹夜祷はなかった。なぜならば私たちの司祭は数日間不愉快な虚構のために去らざるを得なかったからである。彼は無罪である」

2つの記述は無関係ではない。家庭教師ジリヤールの説明によれば、「翌日はクリスマスの祝日であった。そして私たちは教会に向かった。司祭の指示により、輔祭が長寿安泰の祈りを述べた（皇族の日々が長く続くことについての祈り）。これは司祭の側の軽率であり、反動を引き起こすばかりであった。兵士たちは、死の脅迫をしながら、司祭の交替を求めた。この事件は、この時期に関して保持されるはずであった明るい印象を曇らせた。それは私たちにとって新しい圧迫となった。そして私たちに対する監視は、益々厳格となった<sup>27)</sup>」

トボリスクソヴィエトは、「罪」がある司祭の逮捕とロマノフ家の監禁体制の厳格化を求めた。しかしゲルモゲン（Гермоген）主教は、自己の司祭に対する侮辱を許さず、彼を一定期間トボリスクからとある修道院に派遣した。事件に対するソヴィエト代議員からの照会に対して、ゲルモゲンは書簡において詳細な回答をおこなった。そこにおいては、以下のことが強調されていた。「第1に、「ロシアは法的には共和国ではない。誰もそれを宣言していないし、予定されている制憲議会以外、誰も宣言する権能がない」第2に、「聖書、国法、宗義、教会法、また国の統治外の歴史を根拠とすれば、ツァーリと皇帝は、そのようなものとしての位階や彼らに相当する称号を失ってはず、ロマノフ家の聴聞僧アレクセイ神父の行動において言われていることに関して、彼は「何も不埒なもの」を見ないと<sup>28)</sup>」

27) Gillard Pierre, pp.207-208.

28) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.114.

## トボリスク (1918年)

それでも当面は平穏に生活は流れる。

「1月4(17)日木曜日 …ニコライは私たちに朗読をして、私はいつものように作業をした」

この箇所に注釈が付いている。皇族の取り巻きが証言しているように、アレクサンドラとその娘たちは、決して仕事なしに過ごすことはなかった。彼女らは恒常的に、絵画、刺繍、暖かいものを編むことに従事していた。それらはしばしば他人に与えられた。

またシベリアの冬の自然は厳しい。

「1月21日(2月3日)日曜日 …-23度 雪を伴う吹雪…」

同じ日のニコライ日記によれば、次のように記している。「零下24度で吹雪。12時頃、聖体儀礼式。日中1時間散歩。娘たちの広間では、空気が冷たい。8度。他方、私の書斎では9度。正餐の後、タチアナ、アレクセイ、ミスター・ジリヤールが、大いに協力をして、作品「玄関口にて」を演じた。夜は、いつものようにベジク〔カードゲーム〕

事態の悪化を示唆する記述が見える。

「1月26日(2月8日)金曜日 …コミサール、パンクラトフと彼の補佐ニコリスキーが、兵士委員会によりコルニーロフ館から出された。目下のところ私たちに対していかなる関係もない。…」

10月革命の影響がトボリスクにも及び、警備担当の一部の兵士が急進化し、兵士員会を組織、その権限がなかったにも関わらず臨時政府により派遣されたコミサールが切り捨てられた。

「2月1(14)日木曜日 …多くの優秀な兵士たちが私たちのところから去った。…」

また動員解除とともに兵士が帰宅を許された。ツァールスコエ・セローから元ツァーリ一家を警備して、忠誠心があった古参兵たちがトボリスクを去り始めたのである。補充される兵士が、ツァーリ一家に対して良い感情を抱いていないとトラブルが起りかねない。

「2月11(24)日日曜日 …半時間外出、狙撃兵部隊が去るのを観察していた…」

古参兵が去るのを元皇帝夫妻が眺めていたのであるが、同日付のニコライ日記によれば「小山の上から、狙撃兵が橇をつけて完全な隊列で出発するのを見た」とある。小山というのはジリヤールたちが子供のために作ったあの雪の山である。皇后の取り巻きの1人であるゲンドリコヴァ(Гендрикова Анастасия Васильевна) 伯爵夫人は次のように記している。「昨日と本日〔2月12日〕、私たちの派遣隊の3個の大規模な班が去った。私たちと一緒に到着した350人のうち、残っているのは全部でおおよそ150人。非常に良いものが去ったのは残念<sup>29)</sup>」

そして兵士委員会はこの機会をとらえて嫌がらせをおこなう。2月19日、ジリヤールは次のように記している。「兵士委員会は、私たちがつくった氷の山を破壊することを決議した。(これもまた子供たちにとっては大きな気晴らしであった!) なぜならば、皇帝陛下と皇后陛下がそこに出て、そこから第4連隊兵士の出発を眺めたからである。一毎日言い掛かりが付けられる。今はすでに側近に対するだけでなく、皇族に対しても同様である。〔…〕<sup>30)</sup>」

経済的にも制約を受ける。2月からジリヤールと共に家計を再検討とい

29) Там же, стр.151.

30) Gillard Pierre, p.213.

う記述が何度か記されるが、それは一家の生活費に対して次のような新しい制約が課されたのだ。

「2月14(27)日水曜日 …バーリャ〔・ドルゴルコフ〕とともに議論。本日彼は私たちのすべての従僕に対して次のことを述べた。私たちは、7人それぞれが月600ルーブルずつ、すなわち全部で月4,000ルーブル（ママ）を受け取ることになる。それゆえに、新暦（ポリシェビキ暦）3月1日から、従僕のうち10人と別れざるを得ず、もっとつつましく生活し、すべてを自分で行う必要があると」

ポリシェビキ政府からは元皇帝一家扶養のための出費が削減された。2月16日（3月1日）、ジリヤールは次のように、つつましい生活の初めを記している。「新しい秩序が執行された。本日から、バターとコーヒーが、贅沢物として、私たちのテーブルから除外された<sup>31)</sup>」

さて、3月4日、ジリヤールは次のように述べる。「両陛下は、日毎に大きくなる不安にも関わらず、彼らを解放することに務めている人物が、彼らに忠実なものの中にいるという期待を抱き続けていた。状況は脱走にこの上なく好都合であった。トボリスクにはポリシェビキの代表はまだいなかったからだ。私たちに傾倒しているコピリンスキー大佐の共犯があれば、怠惰な警備兵の監視をかすめるのは容易であった〔…〕私たちは何度も皇帝陛下に対して、あらゆる可能性に対して準備することを主張した。陛下は2つの条件を課したが、それはひどく事態を錯綜させた。陛下は、家族が離れ離れになること、私たちがロシア帝国の領土を去ることを許されなかった。皇后陛下はこの件に関して私にある時語られた。『私はどうしてもロシアを離れたくありません。なぜならば、もし私たちが外国に行かざるを得ないとすれば、これは私たちと過去を結ぶ最後の糸を切ることを意味するでしょう。私には思えるのですが、この過去は不可逆的に

31) Ibid., p.213.

破壊されるでしょう<sup>32)</sup>』」

ジリヤールの目論見の当否はともかくも、最後のアレクサンドラ皇后の言葉を引用することで、「ドイツ人」と痛罵されていた彼女の本当の姿を示す意図もあったのだろうと思われる。

3月14日、アレクサンドラ皇后の日記には記述はないが、ニコライ2世の日記には次のくだりがある。「すべての期限の兵士が解雇されたとき、当地における民兵部隊が改革された。警備班は街を回らざるを得ないので、オムスクからこの目的のための部隊が派遣された。今あらゆる武装部隊がそのように呼ばれている、この「赤衛」の到着は、ここにおいてあらゆる噂と恐怖を引き出した。…」

オムスクから補充のために赤軍部隊が到着したのである。ジリヤールも、前の引用文に言及されていた逃亡の可能性がこれにより潰えたと述べている。「100人あまりの赤衛兵の派遣隊が、オムスクから着いた。この最初のポリシェビキの兵士たちは、トボリスクの守備隊に入った。私たちににおいては、逃亡の最後の可能性がなくなった。しかし皇后陛下は私に対して次のように言われた。これらの兵士の中には、兵士として赤軍に入っている多くの将校がいると考える根拠があると。皇后陛下は、どこでそのことを知ったのかを明らかにしなかったが、チュメニには300人の将校が集まっていると断言された<sup>33)</sup>」最後の皇后陛下の発言は、この時期多くの試みがなされた元皇帝一家救出作戦の1つが関連していると思われる。ラスプーチンの女婿であるということで、アレクサンドラが大いに信用をしたソロヴィヨフ（Соловьев Борис Николаевич）が画策したものを指すと思われる。300人の将校が一家の救出に動くというものである。もちろん実現はされなかった<sup>34)</sup>。

オムスクから到着したポリシェビキのコミサールは知事邸内を視察する

32) Ibid., pp.214-215.

33) Ibid., p.216.

34) アレクサンドラ日記にもその痕跡がある。例えば1918年1月24日(2月6日)に、「…アンナ・ヴィルボヴァに対してソロヴィヨフを通じて、26に発つ」という記述がある。すなわち26日にトボリスクを出発する予定のソロヴィヨフを通じて親友に書簡を託したということである。

ことを希望したが、それは知事邸内の警備司令官により拒否されている。3月27日、ジリヤールによれば、「派遣隊と共にオムスクから到着したポリシェビキのコミサールは、館の視察を彼に許すことを求めた。私たちの警備隊兵士は、彼を拒絶した。陸軍大佐コプイリンスキーは非常に不安を感じていて、衝突を恐れている。予防策は、巡回、警備隊の強化。私たちは非常に不安な夜を過ごしている<sup>35)</sup>」コミサールは引きさがり、衝突は回避されたが、不安は残る。

「3月28日(4月10日)水曜日 …子供たちやトゥテリスと共に、自分の宝石を縫い込んだ。…外で15分座っていると、私に対してまたぞろ部屋に戻るように求められた。…」

情勢が悪化しているため、子どもと小間使いとともに万一に備えて宝石を衣服の中に縫い込んだのである。後の文章に関しては、その原因をニコライが同じ日の日記に書きとめている。「風がない素晴らしい晴れた日。昨日私たちの派遣隊の中で、エカテリンプルクからさらに赤衛隊が到着したとの噂の影響のために騒動が起きた。夜までに歩哨が倍増され、巡回が強化され、通りに守備隊が派遣された。この館にいることが危険であるかのように語られ、山の主教館に移る必要性が語られた。一日中このことについて部屋の中などで話がおこなわれた。そして最後には、夜にすべてが平穏となった。それについて7時に、私に対してコプイリンスキーが報告しに来た。さらにアリックスに対して、3日間バルコニーに座らないよう求められた！」つまり、新たにエカテリンプルクからも赤軍が派遣されたために、オムスクとエカテリンプルクの部隊の間で抗争が起きるかもしれないのだ。そのことに関する予防措置がアレクサンドラ皇后に求められたのだ。

「3月30日(4月12日)金曜日 …ベイベーは咳のためにベッドに横になっ

35) Gillard Pierre, p.216.



ている。非常に強烈なものなので、彼の腹膜には少し出血している。

…コプイリンスキーは私たちにモスクワからの指令を伝えた。それによれば、私たちが、私たちの館に、トリナ、ナステニカ、タチシチョフ、ヴァーリヤ、ミスター・ギブスと彼らの従僕を収容するとのことである。部屋の入れ替えに関して何たるせわしなさよ。玄関に障壁がつくられた。刺繍をし、館を駆け、ベイビーとともに座った。…

トリナと2人の女性従僕、ナステニカと彼女の年取った將軍はすでに本日ここで眠っている」

後半部分は、向かいのコルニーロフ館（そこでは基本的に自由が許されていた）から元皇帝一家と親しいものたちが、その地位が逮捕されたものとみなされ、知事邸に収容されたこと。知事邸の住居状況は悪化した。

前半部分はこのような状況悪化の中、皇太子アレクセイの体調が極めて悪化したしたことだ。拙論で扱う時期のアレクサンドラ皇后日記には、アレクセイの不調（くるぶしが腫れた云々）は散見されるが、その中でも最もひどい症状である。日記ではこの日からアレクセイの不調の様子が克明に日々綴られる。

アレクサンドラ皇后は、4月6日付のアンナ・ヴィルボヴァ宛の書簡の中に次のように述べている。「昨日、ついに、〔アレクセイ皇太子は〕少し食べ始めました。非常に悪化しました。初めの数日はスパラを思い出させました。思い出してください。主は慈悲があられます。…背中が痛みます、仰向きに寝るのに疲れました。骨が痛みます。皇太子のそばに一日中座っています。通例は足を支えています。それゆえに私は亡霊に似始めました。当然、復活大祭を家で迎えざるを得ません。彼は軽くなるでしょう、そうすれば一緒に〔…〕<sup>36)</sup>」スパラとは当時のロシア領ポーランド。1912年秋、そこで皇太子の血友病が悪化して、医師に見放されたことを指す。この際、呼び寄せられたラスプーチンの「奇跡」により皇太子の病状が回復したと信じられた。

36) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.187.

「4月10(23)日火曜日 …ベイベーは強い痛みのためにひどい夜を過ごした。…午前中新しいコミサール・ヤコヴレフが私たちのところに立ち寄った。(印象は、知的な、極端に神経質な労働者、技師)…」

「4月12(25)日木曜日 …正餐の後、コミサール・ヤコヴレフが来た。私は、受難週間に教会へ行きたかったのだ。その代わりに、彼は、自分の政府(ポリシェビキ)の命令により次のことを述べた。彼は私たちすべてを連れ去ることになっていると(どこへ?)。ベイベーの病気がひどいことを見て、ニコライだけを連れてくことを望んでいる(もしニコライが欲しなければ、ヤコヴレフは力を用いざるを得ないであろう。)私は、病気のベイベーとともにとどまるか、あるいはニコライに随伴するかを決定せざるを得なかった。彼に随伴することを決断した。なぜならば、私はニコライにより必要とされるであろうし、どこへ行くのかを知らないのはあまりに危険すぎたからである(私たちは自らモスクワへと考えていた)。ひどい苦痛である。マリアは私たちとともに行く。オリガはベイベーの世話をする、タチアナは一家政の世話をする、他方アナスタシアはすべてを整頓するであろう。10[時]半、ヴァーリャ〔・ドルゴルコフ〕、ニュータ〔・デミドヴァ〕、エヴゲニアを連れてくる。一緒にしても、全くとるに足りない荷物。皆と夜のお茶をした後に、私たちの従僕全員と別れの挨拶。夜中子供たちとともに過ごした。ベイベーは眠り、そして3[時]に彼のところに行く、私たちの出発まで。午前4時半に出発。愛しい子供たちと別れるのは恐ろしい。私たちの狙撃兵から3人が私たちとともに行く」

ヤコヴレフ(Яковлев Василий Васильевич)は、白軍の反乱等のために元皇帝一家をより安全なところに移す使命を帯びていた。しかしアレクセイの病気の重篤さにかんがみて、ニコライだけをどこか別の場所に連行することを提案した。アレクサンドラは、アレクセイの病状が落ち着いていたのでその世話を姉妹に任せて、三女マリアだけを連れてニコライに付き従う決意をした。

モスクワと判断した根拠については、警備司令官コプィリンスキーの証言がある。

「私は皇帝陛下に対して、私自身は知らないが、ヤコヴレフのほめかしから、皇帝陛下をモスクワに連れて行くことが望まれていると理解できると報告申し上げた。このように私が当時考えたのは次の故である。ヤコヴレフが4月12日の午前中私のところにやって来て、初めて私に対して、彼が皇帝陛下をお運びすると述べたとき、彼はこの際私に対して、彼は再び家族のもとに戻ると述べたのだ。私は彼に尋ねた。「いつあなたは戻ることを考えているのか」これに対してヤコヴレフは答えた。「そうですね。4-5日で着くでしょう。そこに数日、そしてその後。つまり1週間半から2週間で戻るでしょう」これゆえに私はその当時皇帝陛下に対して、ヤコヴレフは陛下をモスクワに運ぶことを欲しているように思えますと報告申し上げた。それから皇帝陛下は次のように言われた。「彼らは、私がブレスト条約に調印することを欲しているのである。しかし私は、これをするよりも、自分の手を切り落とさせる方がよい」ひどく興奮され、皇后陛下は語られた。「私も行きます。私なしではまたぞろ陛下は何かをすることを強いられます。一度すでに強いられたのと同様に」この際、なにかしら、ロジャンコについて言及された。きっと、皇后陛下は、皇帝陛下の退位の行為をほめかされたのでしょうか<sup>37)</sup>」

モスクワと推定されたのは、トボリスクから4-5日の旅程にあるということがその鍵のようだ。

またここにおいてブレスト＝リトフスク条約のことが皇帝の頭に染みついていたことも関係しているだろう。ジリヤールによれば、3月6日、ブレスト＝リトフスク条約について皇帝が聞いたとき皇帝は沈んでいたという。「朝食後に、調印されたばかりのブレスト＝リトフスク条約について話された。皇帝陛下は、この件に関してものすごく塞ぎこんで意見を述べられた。「これはロシアにとって大いなる恥辱であり、これは自殺に等しい！ ウィルヘルム皇帝とドイツ政府が、自国を売り渡すこのような卑劣漢と握手するほど落ちぶれることができるとは信じることができない。しかし私は、このことが彼らに対して幸福をもたらさない、このことが彼らを

37) Там же, стр.192.

破滅から救わないと確信している<sup>38)</sup>」]

最後の方にロジャンコ（Родзянко Михайл Владимирович）とあるが、2月革命の最中、第4ドゥーマ議長の職にあった時、ニコライに対して退位を迫ったもの1人である。ニコライが退位を決意したとき、アレクサンドラがそばに付いていなかったのが彼女にとっては痛恨の極みであった。アレクサンドラは、ニコライが何らかの決断を迫られたときそれを助ける意図があったのである。

### エカテリンブルク

4月13日金曜日午前4時半、元皇帝皇后三女マリア一行は馬車でトボリスクを発つ。南方のチュメニをめざした。アレクサンドラには、どこに向かうか分からない。また残された子供への不安がよぎる。

「4月13(26)日金曜日 … [午後]10[時]に横になり眠った。ひどく疲れて、全身が痛む。誰も話をしない、私たちはチュメニからどこに向かっているのか—一部のはモスクワと仮定している。子供たちは、川が開かれて、ベイビーが回復しさえすれば、私たちの後を追うはずである。順番に各馬車は車輪をなくす、あるいは何かさらに破壊的な故障が起きる。荷物は常に遅れる。心が痛み、痛みは強まり、私たちの最初の御者に託して子供たちに書簡を書いた」

4月15日午前4時半、チュメニから列車に移る。ヤコヴレフは元ツアーリをエカテリンブルクに移送する指示を受けていた。しかし、エカテリンブルクのウラルソヴィエトの急進分子が元皇帝を殺害する試みを恐れた。そのために、非常にわかりにくい、経路を変更し西進、オムスクに向かった。場合によれば、元皇帝をモスクワに運ぶつもりであったのかもしれない。しかし翌日午前中、列車はオムスクの前で方向を転換して東進し、エ

38) Gillard Pierre, p.215.

カテリブルクに向かった。全露中央執行委員会議長スヴェルドロフ（Свердлов Яков Михайлович）から、すべての「荷物」をウラル地方委員会代表に引き渡すようにとの指示が出たのであった。これに関する詳細はアレクサンドラ皇后には知る由もなかったが、日記には次のような記述がある。

「4月16(29)日月曜日 … (オムスク労農兵代表ソヴィエトは、私たちがオムスクを通過することを許さなかった。なぜならば誰かが私たちを日本に連れて行くことを望んでいるのを恐れているからであった。)」

単なる噂話が記述されているのではあるが、たとえば、ニコライ2世の評伝を書いたドミニク・リーベンがヤコヴレフが元皇帝らを日本に連れて行く意向があったと信じられていたと記している<sup>39)</sup>。ヤコヴレフの不可解な動きがさまざまな解釈を呼んでいる。

4月17日午前8時40分、元皇帝夫妻一行を乗せた列車はエカテリブルクに入る。そこから「荷物」引き渡しに関する交渉が続いた。ようやく午後3時いわずのイパチェフ館に運ばれる。

「4月17(30)日火曜日 … [午後]3[時]、列車から出るようにとの命令を受けた。ヤコヴレフは、私たちをウラル地方ソヴィエトに引き渡さざるを得なかった。その幹部たちは、私たちを3台のオープンカーに乗せて、隙なく武装した兵士たちを積んだトラックが私たちを護衛した。その周りに、高い木製の柵が建てられている、小さな館に着くまで、回り道を通った。ここには新しい警備隊と将校、その他文民が私たちの全ての荷物を眺めていた。ヴァーリャ [・ドルゴルコフ] は入れられなかった。昼食を4[時]半にホテルのようなところから受け取った（配給）－ボルシチと何らかの食糧、私たち3人、ニュータ [・デミドヴァ]、E.C. [ボトキ

39) Lieven Dominic, p.241.

ン]、私たちの2人の従僕がいっしょに食した。私たちのあとに、兵士たちが食糧を受け取った。私たち3人は、隣の部屋で一緒に眠った(ドアなし)、ニュータは食堂で、その後客間で、そこにおいてはE.C.[ボトキン]、私たちの2人の従僕が眠っていた。(排水設備は動かなかった)』

イパチェフ館に入ることが許されたものは、元皇帝夫妻、マリア、医師ボトキン、その他2名の従僕と小間使い合計7名であり、上記のように3部屋に収容された。その他のものは刑務所に投獄、一部は銃殺された。

アレクサンドラの体調はすぐれなかった。次の日記のくだりは象徴的である。

「4月18日(5月1日)水曜日 …日向で+25度。心臓肥大、疲労、頭痛のためにベッドで横になった。…」

私たちの警備司令官—アヴデーエフ(私たちをトボリスクから護衛してきたと思われる)、彼の補佐ウクラインツェフ(かつては兵士、ミーシャがボルジョム付近に狩りに行った時勢子であった)(彼がまだ子供だった時、15年前、オリガはガルラフで彼とあそんだ)、彼は工場で働き、月に300 [ルーブル] を受け取り、彼は大家族である」

新しい警備司令官アヴデーエフ(Авдеев Александрович Дмитриевич)とその補佐ウクラインツェフ(Украинцев Константин)が現れたが、後者はアレクサンドラ記しているように、かつてミハイル大公がおこなった狩りの勢子をつとめ、長女オリガが彼と遊んだものであると見抜かれた。それは事実であり、そのためときの経過とともにウクラインツェフは皇帝夫妻と打ち解けた関係になっていった。しかしそのことは彼にとっては災厄となった。このために彼は警備から遠ざけられ、前線に送られることになった。

イパチェフ館では元皇帝夫妻の生活はさらに一層の制約を受けた。

「4月19日(5月2日)木曜日 …ニコライは本日のお昼福音書を朗読した。兵士たちはサモワールから全ての水を飲みつくした」

イパチエフ館では皇帝夫妻と警備する兵士が同じ館に住むことになり、必然的にそれまでは起こり得なかった兵士が皇帝夫婦の生活に直接介入するということがありえた。日記記述はそれのさりげない表現である。また警備司令官アヴデーエフは次のように回顧録に示して、それが意識的におこなわれていたことを示している。「彼らがエカテリンブルクに連行されるや否や、偽善的な称号は廃止され、従僕だけでなく、元ツァーリと彼の家族を取り巻く人に対して、彼らに名前と父称で呼ぶことが提案された。私たちの側からのこの小さな形式が、彼ら、特にアレクサンドラ・フョードロヴナをひどく不快にした。彼女は私に対して次のように質問した。「なぜ今まで誰も肩書を廃止しなかったのか？」私は彼女に答えた。彼らは今まさに本当の革命家の手に引き渡されたのである。10月革命は、あらゆる肩章をつけることだけでなく、偽善的称号も廃止した。さらに第2の方策が続いた。かつてのツァーリ、その家族、側近に対して、今後はツァーリのように生活することを許さないことであった。[…]<sup>40)</sup>」ツァーリのように生活することを許さないだけでなく、その生活を刑務所のそれに似せることも試みられた。」

「4月26日(5月9日)木曜日 …毎日、警備長と要塞司令官のためにベッドから立たざるを得ない。彼らは、私たちがいるかどうかを確認に来るのである…」

「4月27日(5月10日)金曜日 …8[時]15分。私たちに起きるように命じられた。なぜならば警備司令官が、交替前に15分ほど私たちと会うことと部屋を視察することを望んでいるからであった。昨日彼らは3回交替した」

40) Последние дневники императрицы Александры Федоровны Романовой, стр.204.

イパチェフ館では初期には、毎日警備の引き継ぎのたびに皇族がいるかどうかを確認する作業がおこなわれた。警備側が皇族の私生活に土足で踏み込むようになったのである。イパチェフ館警備司令官アヴデーエフは、次のように述べている。「逮捕者の一日の秩序は次のようである。午前9時に起床、10時に喫茶、その終了後に確認がおこなわれる。それは警備司令官が部屋を回り、勾留者の存在を確認することである。散歩に対して彼らは2時間おこなうことになっていた。しかも彼らはそれを自己の裁量ですることができた。—しばしば彼らは午前中と正餐前に1時間散歩した。昼食は午後1時、4-5時—正餐、7時にお茶、9時に夕食。11時には就寝<sup>41)</sup>」

邸内の散歩についても記されているが、これは上記のようにせざるを得ないという制約でもあるのだ。アレクサンドラも次のように記している。

「5月1(14)日火曜日 …3〔時〕今や私たちに対して毎日2回半時間だけ館から出ることが許可された」

さらに皇族の金銭的状况も調べられた。

「4月27日金曜日 …再び人がやって来て、今回は、私たちがいかほどお金をもっているのかを尋ね（私たち2人）、皆金額を書いて、保管のためにソヴィエトに提出することを余儀なくされた」

マリアがトボリスクにおける姉妹に宛てた書簡が、補足的に事情を述べる。「トボリスクにおける静かで平穏な生活が恋しい。当地ではほとんど毎日不快な驚きがあります。今しがた地方〔執行〕委員会のメンバーが、私たちのそれぞれに対して、誰がどれほどのお金をもっているのかを尋ねました。私たちは署名せざるを得ませんでした。あなたもご存じのよう

41) Там же, стр.209.



に、パパもママも1コペイカも持っていなかったので、彼らは署名しました。何も持っていないと。他方私は、アナスタシアが道中のために私にくれた16ルーブル17コペイカ。他のものはすべてのお金が保管のために委員会に取り上げられ、それぞれに少しずつが残されました。彼らには受領証が出されました。私たちには新しい捜査が免れないと警告されました。14か月の勾留の後で、このように私たちを扱うとはだれも考えませんでした。あなたのところでは、私たちのところでかつてそうであったようによいことを期待します<sup>42)</sup>」

管理は進み。館の窓が白く塗られて外が見えないようになった。

「5月2(15)日水曜日 …この日の午前中館から外出が禁じられた。とある老人が全ての窓を外から白色で塗り、それゆえに上の方だけに空の一部が見えるだけであり、あたかも濃い霧に覆われているかのような様子であり、非常に不快である」

そのような中でも明るい話題もある。残りの家族が合流したのだ。

「5月10(23)日木曜日 …11[時]ごろ、3人の娘が突然アレクセイを連れて現れた—彼らがまたそばにいるというこのような喜びに感謝をする。

その他のものは、もはや中に入れられなかった。料理人ハリノトノフとセドネフ少年以外は。ハンドバックだけが運ばれた。残りについては何の知らせもない。…」

5月4日に、子供たちと従僕はトボリスクからエカテリンブルクへの道中にあると知らせを受けていた。8日には、木曜日(すなわち10日)に到着する予定であること、イパチェフ館において彼らに対してさらに3部屋が割り当てられていた。ただし、上記からうかがえるように、イパチェフ

---

42) Там же, стр.210.

館に入ることが許されたのは、子供4人と料理人等2人にすぎなかった。荷物については後に運ばれた。

もっとも到着の喜びに水を差すような出来事もあった。回復したばかりのアレクセイの怪我である。5月10日のアレクサンドラの日記にはまた次のように記されている。

「…ベイベーをマリアのベッドに寝かせ、4人の娘を隣接する部屋の床の上のソファのクッションと外套の上に落ち着かせた。ハリトノフは一短いソファに、セドネフは、二脚の椅子の上に。夜にベイベーは膝の痛みのために1時間ごとに目を覚ました、ベッドに横になった時、踏み外し膝を損なったのだ。まだ歩くことはできず、彼は担がれている。病気の間に14ポンド減っている」

日記の注記には、アレクセイはおそらく膝の下の靭帯を切ったのだろうとある。彼の血友病を考えれば、必ずしも容易な事態ではない。翌日の日記には次のようにある。

「5月11(24)日金曜日 …私とベイベーは私たちの寝室で食事をした。彼の痛みは生じたりやんだりする。2[時]に正餐。ヴラジミル・ニコラエヴィチ〔・デレヴェンコ〕が来て、ベイベーを診察し、彼の湿布を交換した。しかしアヴデーエフのいるところにおいて。これゆえに一言も言うことができなかった。チェモドゥロフが去った。調子が悪いからである。彼が館から去る以前に完全に引き離され、捜査された。夕食後、ナゴルヌイとトルupp（そしてジョン）が来た。—2時間尋問され捜査された。私たちの側の人間のその他の残りは、トボリスクの方へ送り返された。どこへは知らされていない。トリナ、ナステニカ、タチシチョフ、ヴォルコフは捕えられている。エヴゲニー・セルゲエヴィチ〔・ポトキン〕は、アヴデーエフに対して請願を書いた。地区委員会に届けるためである。—全くかけがえのないものとしてジリクのために請願をした。彼は、非常に苦しんでいるベイベーとともにいるべきであると。

ベイビーは、ナゴルヌイとともに自己の寝室で眠った—4人の娘は次の部屋、すべての寝台が届けられたわけではない。

ベイビーはまたぞろひどい夜を過ごした」

雑然とした覚書の背後から慌ただしい日々の流れが見えてくる。アレクセイの痛みはひどい。デレヴェンコ（Деревенко Владимир Николаевич）医師による彼の診察は、警備司令官アヴデーエフの立ち会いのもとで行われざるを得なかった。

先に到着した従僕のチェモドゥロフ（Чемодуров Терентий Иванович）が館から出され、代わりに、2時間の尋問をへたのちに、従僕のナゴルヌイ（Нагорный Климентий Дмитриевич）とトルupp（Трупп Алексей Егорович）が入れられた。カッコの中のジョンは犬の名前と思われる。さらにボトキン医師は、皇太子の看病のために家庭教師ジリヤールを館に入れるよう請願した。しかし後に何度も請願されるが、決して認められることはなかった。

「5月13(26)日日曜日 …すべては雪で覆われた。輝く日が照る。ベイビーにおいてはまたぞろひどい夜。しかし日中は素晴らしく過ぎた。数回青い光で暖まり、少し多く食べた。一日中彼は私たちの部屋で横になっていた。またぞろ正餐は遅くもたらされた。他のものは少し散歩するために外に出た。ヴラジミル・ニコラエヴィチ〔・デレヴェンコ〕が来たとき、部屋の中にはさらにまた医師のようなものがいた。コミサール、警備司令官、警備長はまたぞろすべての子どものものを検査した」

アレクセイの体調のひどい状態は続く。デレヴェンコ医師のアレクセイ診察の際に立ち会った医師のようなものとは、後にイパチェフ館警備司令官となり（元皇帝一家の殺害を指揮する）ユロフスキー（Юровский Яков Михайлович）である。そして最後には、子供たちと一緒に運ばれたものが詳細に調査されていることが窺われる。

アレクセイの体調が悪く看病に人員が必要である中、イパチェフ館の人

員が連れ出される。

「5月14(27)日月曜日 …6〔時〕半、セドネフとナゴルヌイは、管区委員会で拘禁された」

「5月15(28)日火曜日 …とうとうヴラジミル・ニコラエヴィチ〔・デレヴェンコ〕がやって来た。彼と話すことはできなかった。なぜならばアヴデーエフが常にいたからだ。私は、一体いつナゴルヌイが再び私たちのところに入れられるのかを尋ねた。なぜならば、私たちは彼なしでどのようにしてやっていくのか分からないからである。アヴデーエフは知らないと答えた。私たちはもはや彼と会えないのではないか、セドネフとも会えないのではと恐れられた」

皇帝ヨット「シュタンダルト」の水兵セドネフ（Седнев Иван Дмитриевич）とナゴルヌイは、皇帝一家から隔離されて収監され、決して戻ることはなかった。

皇族の私物の捜索に対する対抗策も試みられている。長女タチアナが、おそらくアレクサンドラの宝石を衣服等に縫い込み隠そうとしたのだ。

「5月16(29)日水曜日 …タチアナは私の宝石を縫い込んだ…」

イパチェフ館を取り巻く状況も悪化した。

「5月16日(6月8日)土曜日 …私たちの周りで恐るべきせわしいことが起きている。すでに3日、私たちはいかなる新聞も読まされていないし、夜には強い風が吹いた。」

この記述はチェコ軍の反乱と関係している。チェコ軍がウラジオストクから欧州に引き返す過程で、赤軍の武装解除に抗して立ちあがり、シベリアのいくつかの都市を占領している。エカテリンブルクではすでに5月16日に戒厳令が導入されている。

「5月31日(6月13日)木曜日 …アヴデーエフがやって来て、私たちに荷造りをするようにと述べた。なぜならば、いつ何時出発せざるを得ないかもしれないからである。昼の残りや夜のすべて、荷造りがおこなわれた。…深夜にアヴデーエフがまた来て、言った。数日間は、私たちは出発しないと。私たちに対して日曜日にセドネフとナゴルヌイを返すこと、他方ヴラジミル・ニコラエヴィチ〔・デレヴェンコ〕を汽車に乗せることを約束した。私たちの残りの人物とヴァーリャ〔・ドルゴルコフ〕は、3日前にトボリスクに発ったと述べた」

同日のニコライ日記によれば、チェコ軍反乱とは別に、「アナキストの攻撃」、すなわちイパチェフ館襲撃、元皇帝一家拉致と殺害等が恐れられているのである。「アヴデーエフが来て、エヴゲニー・セルゲエヴィチ〔・ボトキン〕と長く話をした。彼の言葉によれば、彼と地区ソヴィエトはアナキストの攻撃を恐れている。これゆえに、私たちはおそらくモスクワに対して早期の出発が迫っているかもしれないという！彼は出発に対する準備を求めた。直ちに片付けが始められた。しかし、アヴデーエフの特別の請願により、警備兵の注意を引かないために、静かにおこなった。夜の11〔時〕頃、彼は戻って来て、また数日残ると述べた。これゆえに、6月1日には私たちは、何も解かずに野営のままであった」

6月12日、エカテリンブルクでアナキストが2人逮捕される事件があり、それを発端として騒動が起きたが、それはすぐに鎮圧された。

なお、アヴデーエフがアレクサンドラに語った、ヴァーリャ(ドルゴルコフ将軍)がトボリスクに発ったというのは虚偽であり、すでにこの時点で銃殺されている。また従僕セドネフとナゴルヌイの返還も食言に終わった。

「6月4(17)日月曜日 …1〔時〕20〔分〕、正餐、ハリトノフにより準備された—今や彼が私たちに食事を準備せざるを得ず。作業をした、非常に暑く、息苦しい。なぜならばすべての窓が閉じられていて、至る所に台所から強烈なおいが広まっているからである。…」

これまでは、元皇帝一家の食事は外部で調理されたものを、イパチェフ館で温めるだけであった。しかし何らかの理由で外部での調理がなされず、イパチェフ館で料理をせざるを得ない状態になったとある。その副作用はイパチェフ館のすべての窓が閉ざされているので、調理と共に内部が耐えられない暑さになったことである。何らかの対策が必要とされる。

「6月9(22)日土曜日 …何らかの人物(ひょっとすれば〔言葉が削除されている〕委員会からからも知れない)がまたぞろ、窓を検査するために来た。…」

中央から派遣された人物が窓を視察に来た。

「6月10(23)日日曜日 …2人の兵士がやって来て、私たちの一部の窓の窓枠を取り除いた。とうとう何たる喜び、かぐわしい外気、そしてもはや白い塗料で塗られていない窓ガラスだけである。…」

かくして窓が開けられたのである。

「6月11(24)日月曜日 …窓は一晩中開いていた、素晴らしい空気、しかし非常に暑い一部屋の中で19度半…」

この記述は窓が開けられるようになったことの論理的帰結である。さらに、それ以外の意義があることがこの日記の注釈に示されている。この時期、元皇帝一家に逃亡を勧めるとある将校からのフランス語の手紙が届いていたのである。逃亡のためには窓がはずされている必要があるので示されたいという指摘があった。それに応じるためのサインであるというのだ。

20日から25日までに受領された書簡には、「神の御加護とあなた方の冷静沈着のために、私たちは、リスクなしに成功する期待があります。あなた方が窓を必要とときに開けられるために、1つの窓が外されていることが必須です。十分にこの窓を示してください。〔…〕安心してください。

いかなる試みも、成功の完全な確信なしにはおこなわれまいでしょう。神、歴史、私たちの良心にかけて、私たちはあなた方に厳粛な約束をします。とある将校」。今日この書簡は、チェーカーにより作成されたものであることが判明している。元皇帝一家を罫にはめるためである<sup>43)</sup>。アレクサンドラ日記からうかがわれるように、警備側が都合よく、窓をはずしていることが疑わしい。

「6月15(28)日金曜日 …夜に、私たちは、部屋の下で警備兵に対して窓におけるあらゆる動きを注視するよう命じられるのを聞いた。—またぞろ彼らは、私たちの窓が開けられて以来、異常に疑い深くなっている。今は窓の敷居に座ることさえ許されない」

「6月19日(7月2日)火曜日 …今やアヴデーエフは、私たち皆が所定のところにいるかを確認するために、朝夕来ざるを得ない。本日、日中やって来て、私が館から出ないのは私の不健康が原因かどうかを尋ねた。—委員会が実際のところこれを信じていないようである」

アレクサンドラ皇后が逃亡の準備に忙しいと疑われたのであろうか。アレクサンドラ皇后は、イパチェフ館に移動して以来不健康であった。それは日記に、頭痛、ふらふらする、衰弱を感じると断片的に見られる。許されていた散歩に出たことも限られている。そして、この頃、元皇帝一家は、一時は期待をかけたこの逃亡の誘いに対して拒否の返事を最終的におこなっている。それと一致するかのようにイパチェフ館の窓枠が付けられた。

「6月28日(7月11日)木曜日 …10[時]半、外部で労働者が現れ、私たちの唯一の開いている窓の上に鉄製の柵を取り付けた。疑いないことであるが、私たちが外にすり抜けること、または警備と接触することが常時恐

43) Там же, стр.245. マーク・スタインバーグ／ウラジーミル・フルスタリョフ編、328, 360-371頁。

れられているのだ。強い痛みがやまない」

またこれより少し前（5月28日）、ニコライ2世は日記にイパチェフ館警備に関する不安を記している。兵士たちのモラルの低下のために、皇帝一家の私物を盗んでいると断じているのだ。「私たちの長持ちが置かれている倉庫で、恒常的に箱が開かれ、トボリスクから持参した種々の物資と食料が取り出されている。しかもこの際いかなる原因の説明もない」

これが大きな結果につながった。

「6月21日（7月4日）木曜日 …正餐時に地区委員会議長が何人かの人間とやって来た。アヴデーエフは更迭された。私たちのところには、今や新しい警備長官がいる。（彼はかつてやって来てそしてベイビーの足を診た、他方別のときは—私たちの部屋を確認した）若い助手を伴っていた。彼は、他の人物が—卑俗で礼儀をわきまえないのに、礼儀正しいように見えた。私たちのすべての内部警備隊は去った（彼らが倉庫の中で私たちのものを盗んだことが明らかになったのかもしれない）彼ら2人は私たちに対して私たちの身につけているすべての宝石を示すように強いた。彼らのうちの若い方はすべてを詳細に記録し、それらを私たちのもとから持って行った。（どこへ、どの程度、なぜなのか???知らない）、私には、私から取り上げられなかった、レオ叔父からの2つのプレスレットが残され、子供たちにおいては、私たちが彼らにあげて、取り上げられなかった1つずつのプレスレットが残された。ニコライの婚約指輪が取り上げられなかったのも同様」

新しい警備司令官はユロフスキーであり、すでにアレクセイの治療に立ち会ったことで、アレクサンドラは見たことがあった。取り上げられた宝石類は（もちろん衣服に縫いつけられていたものを奪うことまではしていない）、翌日返却され、その上で封印された。その上、23日には、ニコライのもとに兵士により盗まれた時計も返却されている。またアヴデーエフのもとでは、近隣の修道院から毎日パイ、肉、卵等がイパチェフ館に運ば



れていた。アヴデーエフはその一部を元皇族に渡していたにすぎなかった。ユロフスキーは、その横領を発見するや否やそれをやめさせた。すべての食料は皇族のもとに届いた。しかし3日にすぎなかった。ユロフスキーは、このような食料供給を認めたのがアヴデーエフということ突き止めてから、基本的に牛乳以外はこのような流れを認めなくなった。館に運ばれるのは市民に認められている配給と同等となった。それが食料事情の悪化という形で、アレクサンドラ日記にも断片的に反映される。

「6月27日(7月10日)水曜日 …2日間他のものは肉を食べず、ハリトノフがトボリスクから持って来た食料備蓄の残りを食べている」

「6月28日(7月11日) …6日分の肉が運ばれた。しかし非常に少ない。これではスープにしか間に合わない」

エカテリンプルクの状況の悪化も、イパチェフ館にまで届いて来る。チェコ軍の反乱に伴う混乱である。

「6月29日(7月12日)金曜日 …2週間、砲兵と歩兵が側を通るのを常に聞いている。2度ばかりは騎兵が通った。また2度、部隊が音楽とともに行進をした。思うに、これはオーストリアの捕虜であろう。彼らはチェコ人(これもまた私たちの捕虜)に対して反抗し、部隊とともにシベリアを通過していて、すでに当地からかなり遠いところにいるものであろう。負傷者は毎日市街に到着している」

アレクサンドラ皇后の日記は7月3(16)日火曜日で終わっている。そこに気にかかることが書かれている。

「7月3(16)日火曜日 …全く意外なことであるが、ルカ・セドネフが叔父を訪問するために外に出された。そして彼は逃げた—これが本当かどうか知りたい、そして私たちがいつこの若者に会えるのかどうか知りたい!!」

ルカ・セドネフはコック見習いである。ユロフスキーの言によれば、7月16日午後2時ごろ、ニコライ処刑の指令をモスクワから受けたが、その際セドネフ少年を除外する必要があると示されていたという。彼の言う通りなのか、はたまたニコライ処刑はウラルのポリシェビキの発意によるのかは、未だに論争が絶えないが<sup>44)</sup>、元皇帝一家は、この翌日未明、イパチェフ館において全員銃殺されたのだ。

## 結びに代えて

「エカテリンブルク

[1918年] 5月6 (19) 日 日曜日

多くの辛酸をなめた義人ヨブ

ニコライの50歳の誕生日…」

このアレクサンドラ日記の何気ない記述が筆者の気にかかる。文学作品としても高名な旧約聖書『ヨブ記』の主人公義人ヨブの名前が書かれているが、正教会ではこの日をヨブの日として祝うのである。そしてその日はまたニコライの誕生日でもある。アレクサンドラはニコライとヨブを同一視しているのである<sup>45)</sup>。

義人ヨブは、妻や家族、財産まで奪われ、病気により自身の身体をさいなまれても、決して神に対する信仰を失うことはなかった。そして義人ヨブの信仰は、最終的には失われたものすべてが回復するということで報われる。ニコライは、この時点では家族を失ってはいないが、皇帝の座、帝国、財産、名声などを革命によりなくしていた。アレクサンドラは、これを神の試練と見たのであろうか。アレクサンドラは神への信仰を失わず、ニコライや家族を支え続けた。アレクサンドラの信仰心は、それまではどちらかと言えば彼女の視野を狭め、頑固にして柔軟な思考を妨げ、あるいはラスプーチンを媒介として、皇室の名誉を損なうことに繋がりがちで

44) 前掲書、335頁。

45) 前掲書、170頁。

あった。だが、その信仰のおかげで、革命の混乱の中、また先が見通せない中、大きく動じることなく、平穏な生活を送ることができたのであろう。

イパチェフ館に派遣されたコミサールであり、元皇帝一家を処刑した責任者ユロフスキーは、次のようにアレクサンドラを中心として回る生活を描いている。

「アレクサンドラ・フォードロヴナは、相当堂々としてゆるぎない態度であり、明らかであるが彼女が誰であるかを思い出させた。…私が彼女を見た状況では、彼らは、妻のしっかりとした手腕に導かれた穏やかな家族であった。ニコライは、皮膚のたるんだ顔をして、極めて平凡で、素朴で、言ってみれば、農村の兵士のように見えた。

アレクサンドラ・フォードロヴナを除いては、家族の中に横柄さは、誰の中にも認められなかった。もしこれが人民のものすごい血を吸った憎むべき皇族でなければ、彼らを素朴で横柄でない人たちと考えることができたであろう。例えば、娘たちは台所に駆けて行き、料理の手伝いをし、パン生地をこね、あるいはカードでドルッキまたはペイシエンスをおこない、またはスカーフの洗濯をした。常に質素な服を着て、きらびやかな服はなかった。ニコライは全く『民主的』に振舞った。後に明らかになったのであるが、彼には予備として10足ほどのよい状態の新しい長靴があったのだが、彼は常につきの当たった長靴をはいていた。一日に数回浴場で入浴することが彼らに大きな満足を与えた。しかし私は彼らに対して頻繁に入浴することを禁じた。水が十分でなかったからだ。もしこの家族を住民目線で見れば、彼らは全く悪意のないものであった<sup>46)</sup>」

「もしこれが人民のものすごい血を吸った憎むべき皇族でなければ」という留保が付いているが、それを除けば、極めてつましい元皇帝一家のほほえましい描写にすぎない。ユロフスキーがこのようなことを残したことに驚くほどの意外性を感じる次第である。

---

46) Последние дневники императрицы Александры Федовны Романовой, стр.257.